

宜野湾高校の生徒達へ（46）

2020.10.2

『宜野湾高校の生徒達へ(43)』で取り上げた、あさのあつこさんの「大人の価値観にしばられず自分を認めてほしい」の文章が気になっていた。そんな時、TVで『モモ』に関する番組(100分 de 名著)を見た。

『モモ』(ミヒヤエル・エンデ、1976年発行)の表紙には、「時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえてくれた女の子のふしぎな物語」と書いてある。「時間どろぼう?」、「女の子が時間を取り戻す?」などの疑問がわいてくる。訳者の大島かおりさんは、あとがきにこう書いている(一部引用)。

「**時間がない**」、「**ひまがない**」—こういうことばを私たちは毎日聞き、じぶんでも口にします。いそがしいおとなばかりではありません、子どもたちまでそうなのです。けれど、これほど足りなくなってしまった「時間」とは、いったいなになのでしょう? 機械的にはかることのできる時間が問題ではありません。そうではなくて、人間のこころの内の時間、**人間が人間らしく生きることを可能にする時間**、そういう時間がわたしたちからだんだんと失われてきたようなのです。このとらえどころのない謎のような**時間**というものが、このふしぎなモモの物語の中心テーマなのです。

主人公の**モモ**は、年齢も素性もわからない**浮浪児**です。ほんらい、現代のように完全に組織されてしまった社会は、浮浪児というものの存在を許しません。ですからここではモモは、管理された文明社会のわくの中にまだ組みこまれていない人間、現代人が失ってしまったものをまだ豊かにもっている**自然のままの人間**の、いわば**シンボル**のような子どもなのです。

あいての話をじっと聞くことによって、**その人に自分自身を取りもどさせることのできるふしぎな能力**、**宇宙の音楽をききとり**、**星々の声に耳をかたむけることのできる能力**を持ったモモは、**人間に生きることの本当の意味**をふたたびさとらせるために、この世に送られてきたのでしょう。



右上図は『モモ』の表紙で、古ぼけただぶだぶの男の上衣を着ているのがモモ。その横にいるのが「カシオペア」というカメで、モモをマイスター・ホラ(時間の国の主)の元に案内してくれる。私が印象に残ったのが、モモとマイスター・ホラとの会話(一部引用)。

時計というのはね、人間ひとりひとりの胸の中にあるものを、
きわめて不完全ながらもまねて象ったものなのだ。
光を見るためには目があり、音を聞くためには耳があるのと同じに、
人間には**時間を感じるために心**というものがある。
そして、もしその心が時間を感じとらないようなときには、
その時間はないもおなじだ。
ちょうと虹の七色が目の見えない人にはないもおなじで、
鳥も声が耳の聞こえない人にはないもおなじなようにね。
でもかなしいことに、**心臓はちゃんと生きて鼓動しているのに、**
何も感じとれない心を持った人がいるのだ。



右上図は「時間の国」を表したと思われる『モモ』の裏表紙。マイスター・ホラはモモに「**時間のみなもと**」を見せてくれる。「時間のみなもと」の描写も興味深いですが、長くなるのでここでは省略する。絵を描くことに関心がある人は、あなたがイメージする「時間のみなもと」の視覚化に挑戦してほしいものだ。

「童話の形式をとりながらも、時代へのするどい風刺にあふれ、深くゆたかな人生の真実を告知している」と訳者の大島さんはあとがきで書いている。**童話**には、大人が読んでも子どもの時に読んだときとは違った発見がある。「**時差ある気付き**(落合恵子)」とでも言えようか。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎